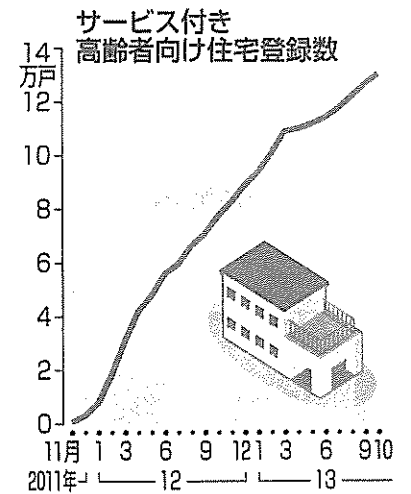


# サービス付き 高齢者向け サ高住は玉石混交



入居は原則60歳以上

サービス付き高齢者向け住宅は、大半が賃貸。2011年10月から都道府県などへの登録が始まった。バリアフリー構造で安否確認と生活相談が必ず付く。介護事業所の職員らケアの専門家が少なくとも日中は建物に常駐。介護や家事サービスの有無は住宅によって異なる。入居者は原則60歳以上で、本格的な介護は必要ないが、1人暮らしが不安なお年寄りに適しているとされる。

国土交通省の調査では、13年8月末時点で95%の物件で食事を提供。介護サービスがあるのは49%で、専門家が24時間常駐しているのは74%だった。介護や医療系事業者の運営が多い。

生活相談や安否確認が受けられる「サービス付き高齢者向け住宅（サ高住）」が注目を集めている。手厚い介護サービスを提供したり、みどり専門のホスピス機能を持つたりするサ高住も登場。一方、安否確認など最低限のサービスしか提供しない物件もあって「玉石混交」といわれ、住宅選びが難しくなっている。

サ高住は一般的に、民間なり、入りやすいのが特徴の有料老人ホームに比べる。2013年10月時点での入居一時金などの費用が、全国に約13万戸となり、1安。また入居待ちが多い。年で約7割増えた。特別養護老人ホームとは異、千葉市の生活クラブ風の



サービス付き高齢者向け住宅の部屋で過ごす白井さん(左)と妻のたま江さん(右)  
(千葉市の生活クラブ風の村サポートハウス稲毛)

村サポートハウス稲毛。団地の跡地に11年にできたサ高住で、約20人が暮らす。同じ建物内に介護事業所や診療所があり、介護サービスが受けられる。住民のほとんどが介護保険の要介護認定を受け、認知症の人もいるが、介護の必要度が低い人が多い。家賃や管理費などは月約14万円。希望者には食事が付き、食費や介護サービス、診療所への付き添いは別料金。夜間も職員が常駐している。

## 脳梗塞患い移住

白井新七さん(70)は都内に住んでいたが、脳梗塞で介護が必要になり、このサ高住のワンルームの

施設より自由ホスピス機能も登場

## 介護に濃淡 選択に難しさ

部屋に移り住んだ。妻のたま江さん(70)は隣接した団地に住み、朝昼晩と食事を持って訪れ、一緒に食べる。

## 付き添い別料金

「自宅で介護している時は追い詰められ、主人にあってしまふこともあった。今は専門家に安心して任せられるので、優しい気持ちで接することができるとたま江さん。老人ホームのような施設では食事時間などの決まりに従う必要があるが、サ高住は施設よりずっと自由に暮らすことができる。

ただ、サ高住も課題を抱える。原則、定額料金の介護施設とは異なり、付き添いや介護サービスなどは別料金のため、毎月の支払額が変わることが多い。元氣な入居者からは「認知症の人も多く、話し相手がいない」といった不満の声も聞かれるという。

特色のあるサ高住が増える一方、夜間は職員がいないう物件もある。国土交通省によると、介護サービスを提供しているのは約半数にとどまる。

高齢者の住まいに詳しいタムラフランク・ニング&オペレーティング(東京)の田村明孝社長は「本格的な介護が必要な人には適さず、また元氣な人には(見守りなどが)不要なため、サ高住向きの人は実はそれほど多くない。問題があっても賃賃なので表面化しにくく、空き室も自立」と指摘。「同じサ高住とは言えないほど玉石混交。専門家の意見を参考に慎重に選んでほしい」とアドバイスする。

が望めば自宅でのみとりも

暮らし  
コンパス